

農業経営に必要なのはリーダー

北海道農業企業化研究所（HAL財団）企画・業務部門企画部担当部長 上野 貴之

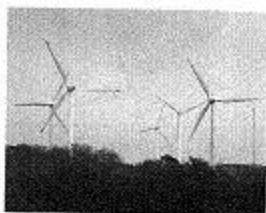
今年度のHAL農業賞神内大賞には、留前管内苫前町の有限会社無限樹が選ばれた。今年で二回目のHAL農業賞は、企業の経営の農業を推進させていく上で模範（目標）となる農業企業、企業化が進んでいる農業企業、営農団体に贈られるものである。HAL農業賞は、農業の新しい経営ス

食生活の基本担う

HAL農業賞の中でも、企業化の実践・実績が特に優れている企業・団体に、財団設立者の名前が付いた

神内大賞が授与されるのである。昨年の谷口農場（旭川市）に続き、今年は無限樹と、偶然ではあるが北海道農業法人会議の会長・副会長と受賞が続いたのである。留前を過ぎ、一時間ほどで無限樹のある苫前町に入る。風力発電の風車群が圧

巻である。かつて開拓のころに、この地では、ヒグマによる農作物や人の被害があつたそう、その被害を題材にした地域演劇もあり、ペアロードという名の通りもある。北緯四度に位置し、北海道でも北部にあるが、対馬海流の影響で比較的温暖で、稲作を中心とした野菜作や畑作との複



風力発電の風車群

合経営、酪農経営など多様な農業形態を展開している地域である。そのような気象状況を生かし、食生活の基本である農産物を安全でおいしく、安価で、安定して生産していきたいという無限樹社長の大川さん。今回のHAL農業賞神内大賞受賞のポイントから同社を紹介する。

骨のある経営

表彰式も終え、収穫もひと段落した十月に入り、筆者はあらためて無限樹を訪ねた。

同社は、苫前町の三沢地区にあり、地域の水田のうち五割を超える面積を有し、畑を含めた耕地面積は一六〇㊦に達するという。



大川博文さん



HAL農業賞表彰式



無限樹の事務所と施設

年間売り上げが約二億円の農業企業である。

社長の大川さんは、笑顔と少しばかり大きな声で出て迎えてくれた。大川さんの印象は、元氣、豪快という言葉が似合う。今、農業経営に必要なのは、リーダーであり、形だけの経営者ではない」と言い切る姿は、力強さと自信を感じる。

作物は、自然の下、その恩恵で生育するという考えは、会社の理念にもなっている。「昔からの、当たり前をつくり方を丁寧にきちんとやっている。それらを分かってくださる人に自分たちのつくったものを手から手へ渡していきたい」とい

う言葉につながり、現実化している。言葉だけではない信念と行動がそこから伝わってくるのである。まさに骨のある経営者である。

楽しいことが光る

経営テーマとして、3Y・3A・3Jを取り上げている。意味するところは、「夢・余裕・安らぎ」の3Y、「安価・安全・安心」の3A、そして「自主・自立・自由」の3Jである。今でも農業をキツイ・キタナイ・カコクスの3Kととらえる人がいる中、このような経営テーマで農業経営に取り組む姿は、多くの農業

者・農業経営者にとって力強いけん引力となることである。しかし、大川さんは言う、「つらいから楽しいことが光る」と。

さらに、「夢とは私自身の現実的な夢ではない。従業員みんながそれぞれの夢を持って、自分の夢や希望を持って仕事ができる農場であるべき」と言う。無限に伸び行く可能性を農業において実現しようと命名した社名は、これらのテーマの下、まさに無限に伸びて行くのであろう。

経営資源の最適化

つい数年前まで農業に限



自社販売率は8割を超える

らず、多くの企業では経営指標の最重要項目に売上高を掲げてきた。もちろん現在でもその論理は通用し、分かりやすい指標である。しかし、売上高だけでは費用の部分が見えにくい。やみくもに売上高だけを伸ばすことに躍起になり、経費が必要以上に高かったり、経営が成り立たなくな

る。無限樹では、利益率を高める経営を目指しており、作付け作物、人員配置、雇用体系、設備投資などの経営資源を最適化する努力を展開している。そこには、

今求められる計数に明るい

自負と嘆き

あらためて、同社の経営ポイントを記すと、①明確な経営テーマ②多品種栽培に代表されるリスク分散③顧客指向となる。

さらに、筆者が感じたのは、大川さんの経営センスである。前段で述べた、「農業経営に必要なのは、リーダーであり、形だけの経営者ではない」という言葉は、一歩先を行く経営者という自負と同時にリーダーの少なさを嘆く声でもある。今後、この言葉をエールととらえ、経営者が現れることを願う。

今回のHAL農業賞神内大賞受賞は、このような経営がもたらしたものである。HAL財団が推進する農業の企業化の先駆的成功例である。

同社のますますの発展と、同社を目標とする北海道の農業法人に期待するところである。



道材運搬の雇用体系